

川村驥山略年譜

平成16年 財団法人驥山館 作成

年代	歳	西暦	事項
明治15・壬午	0	(1882)	5月20日、静岡県袋井市に生れる。 父・東江は40歳にして男子を得る。姉三人と妹一人。慎一郎と命名。
" 16・甲申	1	(1883)	楊守敬帰国。 呉雲没
" 18・乙酉	3	(1885)	父から漢学と書を習う。 第一回文検実施。 趙之謙、陳介祺没
" 19・丙戌	4	(1886)	四書五経を素読。 胡公壽没
" 20・丁亥	5	(1887)	作品「大丈夫」。可睡齋方丈・西有穆山禅師より般若心経を学ぶ。 書き方改良会が、横左書きを提唱する。
" 21・戊子	6	(1888)	日課として孝経を二十字づつ暗記して書く勉強をする。草書を覚える。 山岡鉄舟没
" 22・己丑	7	(1889)	刮目尋常小学校に入学。太田竹城の書塾に入門。 西の神童と言われた伊藤明瑞が生れる。 東京美術学校開校。
" 23・庚寅	8	(1890)	岡田良一郎の冀北学舎で漢学を学ぶ。 徐三庚、潘祖蔭没
" 24・辛卯	9	(1891)	刮目尋常小学校を2年間で4年の課程を終えて卒業。この頃には孝経、 忠経、論語、出師表、赤壁賦などはすべて暗記して書くことができた。
" 25・壬辰	10	(1892)	二葉と号し、ときの静岡県知事・小松原英太郎(後に文部大臣)の推奨 で、県内の小学校を巡回して模範揮毫をする。
" 27・甲午	12	(1894)	明治天皇銀婚式典に、楷書孝経と草書出師表を諳書して献上し、遠州 の神童 川村二葉の名声が全国に広がる。 日清戦争が始まる。 張裕釗没
" 29・丙申	14	(1896)	静岡県下の各学校巡廻揮毫を終る。 大口鯛二が、西本願寺三十六人集を発見する。 楊見山、任伯年、虚谷没
" 30・丁酉	15	(1897)	書家として独立し全国行脚をする。京都では、谷如意、江馬天江、富岡 鉄斎、神田香巖等の益を受ける。富永節堂と詩文の研究をする。 奥蘭田没
" 31・戊戌	16	(1898)	奈良で、越智哲に漢学を学ぶ。
" 32・己亥	17	(1899)	奈良で、侠客・一柳石松の客として滞在し、詩、書の勉強と、仏像や古 写経の研究をする。 勝海舟没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

〃 33・庚子 18 (1900) 神戸で本田退庵、画家の橋本関雪と知り合う。関雪とは、画と書で行こうと将来を約束する。本田退庵と神戸湊川に書道塾「翰墨林社」を開く。中国、義和団の乱が起こる。

〃 34・辛丑 19 (1901) 大江卓に招かれて上京。小室屈山に学び、論語より、号を驥山、字を子叔と名付けられる。剣聖と称された中山博道に書を教える。
江馬天江没

〃 35・壬寅 20 (1902) 徴兵検査を受け、不合格となる。3月、「驥山」改号披露を可睡斎で催す。
篠田芥津、呉大澂没

〃 36・癸卯 21 (1903) 5月、奈良五條の桜井寺に寄寓。9月より高野山に籠り、空海の書を研究する。作品・草書般若心経六曲一双。
高橋泥舟没

〃 37・甲辰 22 (1904) 5月、長崎の皓台寺に寄寓。同寺の方丈・霖玉仙禅師に師事し九州各地を回り書道と中国文化の研究をする。
日露戦争が始まる。 翁同和没

〃 38・乙巳 23 (1905) 皓台寺では参禅し、禅僧たちに書を教えた。12歳の江川碧潭もいた。
副島蒼海、巖谷一六、北方心泉、岸田吟香、谷如意没

〃 39・丙午 24 (1906) この年も皓台寺に寄寓しながら、九州各地を歩く。
俞曲園没

〃 41・戊申 26 (1908) 8年ぶりに神戸に戻る。橋本関雪と再会する。京阪神、奈良の各地を回って書跡、名鐘の研究をする。豊田きく子と結婚をする。書道塾「惜陰書塾」を開く。
師の小室屈山没

〃 42・己酉 27 (1909) 10月、長女・佩玉が生れる。名を和気、号を佩玉、字を婉愉と命名する。上海豫園書画善会が創立する。発起人は呉昌碩、高李庵、楊逸等。
中井敬所、伊藤博文、浜村蔵六(五世)没

明治43・庚戌 28 (1910) 11月、清浦奎吾の斡旋で内閣賞勲局に勤務のため上京。犬養木堂等の知遇を受ける。
小野湖山、重野成斎没

〃 44・辛亥 29 (1911) 家族も上京し本郷に住む。東京勸業博覧会美術書道部に出品する。12月に長男・欣也が生れるも、生後40日で死亡する。

〃 45・壬子 30 (1912) 赤坂丹後町に転居。第二回東京勸業博覧会美術書道部に出品する。2月、清朝が滅亡し、中華民国が成立。 7月30日、明治天皇崩御。

大正1・壬子 30 (1912) 大正に改元。12月、次男・健爾が生れる。

〃 2・癸丑 31 (1913) 賞勲局を辞して書専門の生活に入る。新潟に行き、良寛の研究をする。4月3日、東京日本橋倶楽部で蘭亭記念会開催。 西冷印社が創立される。
中林梧竹、西道仙没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

" 3・甲寅 32 (1914) 3月、大正博覧会に出品する。大谷仁兵衛の依頼で「秋興八首」を揮毫する。また神戸に戻る(長田神社隣り)。懷素の研究に入る。母の千代が亡くなる。
第一次世界大戦始まる。
楊守敬没

" 4・乙卯 33 (1915) 1月より長崎、熊本、鹿児島を回る。次女・靄子が生れる。8月、奈良五條に転居し、書道塾を開く。山本家(貴族院議員)との交際が始まる。
西川春洞、中村蘭台(初世)没

" 5・丙辰 34 (1916) 大谷仁兵衛の勧めでまた上京し、大谷の帝国地方行政学会(現ぎょうせい)の文書課に勤務する。以前と同じ赤坂丹後町に住む。勤務の傍らに、書道、漢学の研究と、方々の書道会の育成に参加する。
渡辺沙鷗、丸山大迂、袁世凱没

" 7・戊午 36 (1918) 杉原夷山の依頼で、美術雑誌の原稿書きや、漢詩作成、詩稿の選をする。
前田黙鳳、山田寒山、沈石友没

" 8・己未 37 (1919) 10月、第一回の遊戯三昧会が上野五條天神社務所で開催され、同人となる。

" 9・庚申 38 (1920) 6月、三男・隆信が生れる。大谷の会社に籍があり給料を貰いながら、自由な活動が許された。
杉聴雨、大口周魚、矢土錦山、陸恢没

" 11・壬戌 40 (1922) 3月、平和記念東京博覧会に無鑑査出品。妻・きく子は入選。京都で、蘇東坡赤壁記念会が開かれる。前年に中国共産党が結成。大阪で呉昌碩書画展開催。
日下部鳴鶴、山県有朋、小野鷲堂、森鷗外没

" 12・癸亥 41 (1923) 9月1日、関東大震災。住宅は被害を免れた。
本田退庵、黒木欽堂、陳衡恪没

" 13・甲子 42 (1924) 9月、杉並区和泉町の文殊院の隣りに新築転居。霖玉仙禅師が「長嘯庵」と命名する。
5月7日、師匠の霖玉仙禅師が遷化。日本書道作振会が創立。
永坂石埭、杉浦重剛没

" 14・乙丑 43 (1925) 11月、第一回日本書道作振会展に、清浦奎吾、豊道春海、今泉勇作等と共に参画する。全国的組織での活動が始まる。
孫文、徐星州没

" 15・丙寅 44 (1926) 第二回日本書道作振会展に出品。4月、東京府美術館(後の東京都美術館)が竣工。
12月25日、大正天皇崩御。

昭和1・丙寅 44 (1926) 昭和に改元。

" 2・丁卯 45 (1927) 第三回日本書道作振会展に出品。
久志本梅莊、野村素軒、王国維、呉昌碩没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

" 3・戊辰 46 (1928) 第四回日本書道作振会奉祝展に出品。8月、漢詩の専門誌「東華」が創刊され、毎月詩稿を提出する。7月、戊辰書道会が創立。黒崎研堂、井原雲涯、玉木愛石、近藤雪竹没

" 4・己巳 47 (1929) 第五回日本書道作振会展に出品。第二回戊辰書道会展。松田南溟、瀬川獨活没

" 5・庚午 48 (1930) 11月、作品・石碑「花園稻荷、五條天神社参道」
6月15日、日本書道作振会と戊辰書道会が併合して「泰東書道院」となる。
11月、第一回泰東書道院展が開催され、役員として出品。
田口米舩、江木欣々没

" 6・辛未 49 (1931) 3月21日から4月19日にわたり、文部省、外務省派遣文化使節中国書道使節団が浅間丸で訪中。日中書道史上初めての大型訪中団。団長・河井筌廬、仁賀保香城、西川寧、松本芳翠、柳田泰麓、柳田泰雲、三浦英蘭、西脇呉石、生出大璧、山本李邨、武田霞洞、川村驥山の十二名。
驥山は蘭亭の竹を持ち帰り、杖と筆軸、竹印を作る。(驥山館蔵)
6月、河井筌廬、仁賀保香城、西川寧、松本芳翠、柳田泰麓、宮尾荷亭、服部畊石、川村驥山、吉田苞竹、高塚竹堂、柳田泰雲、篠原泰嶺等が、泰東書道院を辞任。
9月、満州事変勃発。
丹羽海鶴、阪正臣没

昭和7・壬申 50 (1932) 4月3日、東方書道会が創立され、赤坂「幸楽」にて発会式を行ない、創立委員、董事審査員となる。長谷川流石、佐分移山、辻本史邑、黒木拝石等も参加した。
7月、東方書道会の第一回講習会開催、講演をする。
戸隠山に登り、以後戸隠に「帰山会」ができる。
また、この頃より実業家・沢登正斉との交際が始まる。
11月、第一回東方書道会展。
上海事変、満州国建国。
樋口銅牛、柳田泰麓、犬養木堂没

" 8・癸酉 51 (1933) 6月、第二回東方書道会展。
川谷尚亭没

" 9・甲戌 52 (1934) 1月4日、父・東江が93歳で死去。6月、第三回東方書道会展。中国、長征。
山本竟山、東郷平八郎、郡司棹所、久保天随、内藤湖南、石田東陵没

" 10・乙亥 53 (1935) 6月、第四回東方書道会展。漢詩を、国分青厓に師事する。
武田霞洞、益田石華、高林五峰、菊地惺堂、井土靈山没

" 11・丙子 54 (1936) 6月、第五回東方書道会展。作品・「富士登山の詩」(驥山館蔵)
共産党軍の長征終る。西安事件。
下田歌子、木俣曲水没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

" 12・丁丑 55 (1937) 6月、第六回東方書道会展。大谷仁兵衛の熱海の別荘で大飲した後に書いた「飲中八仙歌」(六屏、驥山館蔵)は、川村驥山の生涯の傑作と賞賛される。この頃には別号の酔佛(川村が酔ったらほっとけの意)を盛んに使う。酔余の奇行のあまり「和泉の虎」のあだ名がつく。
尾上柴舟、比田井天来が、帝国芸術院会員を拝命。
8月、日中事変(盧溝橋事件)勃発。

" 13・戊寅 56 (1938) 6月、第七回東方書道会展。作品「十七条憲法」(山本家蔵)
岩田鶴臯、桑名鉄城、簡野道明没

" 14・己卯 57 (1939) 6月、第八回東方書道会展。
比田井天来、服部畊石没

" 15・庚辰 58 (1940) 6月、第九回東方書道会展。 9月、日独伊三国同盟。11月、紀元2600年の記念式典。
中国、汪兆銘が南京政府を樹立。
吉田苞竹、羅振玉没

" 16・辛巳 59 (1941) 6月、第十回東方書道会展。作品「忠経」「孝経」(驥山館蔵)。9月、妻を連れて北京に行く。翌年の3月まで健爾宅に滞在する。中国書道の研究が目的で、多くの文化人とも交わる。北京滞在記を日本の書道誌に寄稿する。
12月8日、太平洋戦争に突入。
大野百錬没

" 17・壬午 60 (1942) 3月、北京より帰国す。6月、第十一回東方書道会展。作品「金剛経三卷」(驥山館蔵)。すべての物資が不足になり配給統制となる。
長尾雨山、佐分移山、宮尾荷亭、清浦奎吾没

" 18・癸未 61 (1943) 1月23日、戦時体制下につき、大日本書道報国会が結成され、7月に第一回大日本書道報国会展が開催。他の各書道展は開催できない状態になる。

" 19・甲申 62 (1944) 作品「章草易经一節」(驥山館蔵)。書苑、日本書道、書の友、書鑑他多くの書道雑誌は、廃刊または終刊となる。 11月、B29の東京空襲が始まる。
岡田起作、杉溪六橋、国分青厓、汪兆銘没

" 20・乙酉 63 (1945) 3月9、10日の東京大空襲。
3月15日、弟子の高梨無線社長の手配で、戦禍を避けて篠ノ井町に疎開する。マツキ商店、その後柳沢の耕心庵に部屋を借りて住む。
5月25日、和泉の自宅は空襲で全焼。
8月15日、終戦。三男隆信、次男健爾が帰国する。5月18日、丸山碧水の訪問を受けたのがきっかけで、逸遊会ができ、長野にも少しずつ驥山の理解者ができはじめる。
作品「楷書蘭亭序」「草書帰去来辞」(信濃美術館蔵、稿本は驥山館蔵)
河井筌廬、岡山高蔭、後藤石農、仁賀保香城、新聞静邨、服部空谷没

" 21・丙戌 64 (1946) 耕心庵の土地を借りて食糧作りをする。読書と臨書に励む。作品頒布会をし揮毫料を耕心庵に寄附し、寺の修理費に充てる。
中国、国・共内戦。 恒川樵谷、足達疇邨、高田竹山、田代秋鶴没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

- | | | |
|------|--------------|--|
| " 22 | 丁亥 65 | <p>耕心庵での晴耕雨読の生活が続く。
7月、豊道春海が帝国芸術院会員を命ぜられる。</p> |
| " 23 | 戊子 66 (1948) | <p>6月、戦前の作品と長野で書いた作品40点を持って、日本橋の三越本店で個展を開催し、大評判となる。表具の裂地と諸費用は沢登正斉が調達した。
8月、第一回毎日新聞社主催全国書道展(現毎日書道展)が開かれ、審査長をつとめる。
10月、第四回日展に書道を五科として加え、参事・審査員をつとめる。長野県書道展の審査長を創設以来つとめる。
暮に吐血し胃潰瘍と診断され三年間にわたり治療を受ける。
そのためこの期間は、好物の酒が飲めなかった。
写真家・島田謹介(長野市松代出身)が、耕心庵の庭に据えたドラム缶に入浴中の驥山を撮影。「超俗の士」としてアサヒグラフに紹介し、驥山の健在ぶりが全国に伝わった。これを機に島田謹介と交際が始まり、島田の写真集の題字を揮毫する。
比田井小琴没</p> |
| " 24 | 己丑 67 (1949) | <p>この年も病床にあった。7月、第二回毎日書道展の審査長をつとめる。
11月、第五回日展の審査員をつとめる。出品作「隷書七言二句」が文部省の買い上げとなる。
10月1日、中華人民共和国の成立。
林祖洞、新井琢斎没</p> |
| " 25 | 庚寅 68 (1950) | <p>この年もまだ病床にあった。毎日書道展には以後毎年出品。書壇院展にも毎年出品。11月、日展出品作「楷書醉古堂剣掃語」(驥山館蔵、款記にも、疾いを力めて書す、とある)。
朝鮮動乱が勃発。
黒木拝石、飯田秀處没</p> |
| " 26 | 辛卯 69 (1951) | <p>5月16日、前年の日展作に対し、25年度日本芸術院賞を受賞する。書道界では初めての受賞となる。
5月26日から、善光寺大本願で個展を開催。
高澤石衛宅、与嘉楼と仮住まいの後、現在地に住宅を新築し転居。
9月28日、宮中にて昭和天皇の御陪席を賜る。日本書道連盟主催の受賞祝賀会が開かれる。また地元長野でも受賞祝賀会が開かれる。
10月第七回日展審査員を務める。出品作「草書曹孟徳詩」(驥山館蔵)</p> |
| " 27 | 壬辰 70 (1952) | <p>第八回日展出品作「易経繫辞上傳」(驥山館蔵)。名古屋にて個展を開催。
小野鍾山没</p> |
| " 28 | 癸巳 71 (1953) | <p>10月、第九回日展審査員をつとめる。出品作「行書六言對聯」
大澤雅休没</p> |
| " 29 | 甲午 72 (1954) | <p>3月から6月まで、佩玉と共に四国八十八霊場を、馬野逸伯の名前で遍路をする。途中、今治の織田子青が驥山と見破って、その様子を「馬野逸伯翁捕り物帖」として、揮毫した作品と共に出版する。帰路、和歌山、奈良、京都を回って帰る
第十回日展出品作「李嶠詠松詩」(驥山館蔵)、また「那智瀑下作」(驥山館蔵)を揮毫する。
信州書芸会が発足し、顧問に就任する。
秋山白巖、吉澤義則、川谷横雲没</p> |

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

＼ 30・乙未 73 (1955) 7、8月にかけて、佩玉と北海道旅行をする。第十一回日展出品作「草書真山民詩」(驥山館蔵)。
北海道旅行中の自作詩「毬藻の詩」(驥山館蔵)
神郡晩秋、大澤竹胎没

＼ 31・丙申 74 (1956) 10月、第十二回日展審査員をつとめる。出品作「良寛詩」(驥山館蔵) 警視庁に「春風接人」「秋霜持己」の大額を揮毫する。
中国、漢字簡化法案交付。毛沢東が、百家争鳴を提唱する。
會津八一、河井章石没

＼ 32・丁酉 75 (1957) 1月、朝日新聞社主催「現代書道二十人展」に出品。以後毎回出品する。第十三回日展出品作「醉古堂剣掃語」(驥山館蔵)
新日展は、日本芸術院、文部省と離れ、新しい法人組織となった。
尾上柴舟、野本白雲、高畑翠石、辻本史邑、徳富蘇峰、斉白石没

＼ 33・戊戌 76 (1959) 5月、長野県の書道文化興隆に寄与した功績により、長野県文化功労賞を受賞する。9月、篠ノ井名誉町民となる。3月、社団法人日展が発足する。
10月、第一回新日展の審査員をつとめる。出品作「前赤壁賦の一節」(驥山館蔵)。
長谷川流石、羽田春埜、土屋竹雨、小笠原長生没

＼ 34・己亥 77 (1959) 6月、日本書道連盟より喜寿記念品を贈られる。9月には長野県書道展運営委員会より喜寿記念の金杯を贈られる。喜寿祝賀会の席上で、円福寺住職より驥山館建設の声が挙がり、これを機に話が具体化する。
第二回新日展出品作「虚堂禅師墨竹讚」(驥山館蔵)。
関野香雲没

＼ 35・庚子 78 (1960) 6月、篠ノ井名誉市民となる。第三回新日展出品作「赤壁両賦抜粹」(驥山館蔵)。11月16日、驥山館建設用地が決まる。
鈴木翠軒が日本芸術院会員に推挙される。
若海方舟、中村春堂、北村春歩、津金雀仙、山下涯石没

＼ 36・辛丑 79 (1961) 4月、訪日中の中国文化人のうち、小説家・劉白羽等の訪問を受け、その後再三訪中の要請があったが、果たせぬことを悔やむ。
4月12日、(財)驥山館設立が認可され、6月5日に建設着工。10月、完成。
6月、長野市丸光百貨店にて書業75年回顧展を開催し、森田子龍が「墨美」川村驥山特集号の取材に来長。「墨美」111号として発刊。
10月、第四回新日展の審査員をつとめる。出品作「独樂園の記」(驥山館蔵)。11月、日本芸術院会員に内定の通知を受ける。

＼ 37・壬寅 80 (1962) 2月1日、日本芸術院会員に就任。3月、日展理事に就任。
5月2日、驥山館落成式が挙行される。理事長・館長に長女の佩玉が就任。一階に惜陰書塾を開く。
6月、日本書道連盟主催の芸術院会員就任祝賀会が開かれる。11月、第五回新日展出品作「自詠・松竹の詩」(驥山館蔵)。

＼ 38・癸卯 81 (1963) 5月、妻の喜寿を祝うが、この年も病床にあり。10月、第六回新日展の審査員をつとめる。出品作「程明道の詩」(長野市役所蔵)。
殿木春洋、中林子鶴、相沢春洋、鈴木豹軒没

年代	歳 西暦	事 項
----	------	-----

-
- ＼ 39・甲辰 82 (1964) 11月、第七回新日展出品作「青山不動白雲去来」東海道新幹線開通。東京オリンピックが開かれる。服部檐風没
-
- ＼ 40・乙巳 83 (1965) 3月12日、妻・きく子が79歳で死去。4月、信濃美術館の題字を揮毫。11月、勲三等瑞宝章を授与。第八回新日展出品作「江上清風山間名月」(驥山館蔵)
-
- ＼ 41・丙午 84 (1966) 11月、第九回新日展出品作「無一物中無尽蔵」(信濃毎日新聞社蔵)。中国、文化大革命が始まる。藤岡保子、野中鳴雪、小菅秩嶺没
-
- ＼ 42・丁未 85 (1967) 朝日書道二十人展出品作「一二三四五六七」(驥山館蔵)。長野市に日展を招致する。この年の夏以降は旅行をせず、近隣を散歩するていどになる。11月、第十回新日展出品作「和」。坂東貫山、太田夢庵、正村八洲没
-
- ＼ 43・戊申 86 (1968) 11月、第十一回新日展出品作「心」(絶筆、驥山館蔵)。山本御舟、高塚竹堂、園田湖城、上田桑鳩没
-
- ＼ 44・癸酉 87 (1969) 2月より病床につく。4月6日、死去。従四位を追賜さる。8日、密葬。5月20日、米寿を祝して全国書道界105名家から作品の寄贈を受け、本葬と同日に「現代名家百人展」を開催。葬儀は、篠ノ井市民会館で、長野市名誉市民葬が営まれた。戒名は、驥山館建設を提案した円福寺方丈・藤本幸邦禅師が、「不老院殿天筆高朗驥山大居士」を贈る。11月、第一回改組日展に遺作「日々是好日」を出品する。アポロ月面着陸。二世・中村蘭台没
-
- ＼ 45・庚戌 - (1970) 3月、信濃美術館において遺作展を開催する。11月、第二回改組日展に遺作「心」を出品する。大阪万博が開かれる。豊道春海没
-

平成17年(2005)8月9日 更新
